歌」を歯牙にかけるのもいさぎよしとしないかのように黙殺する。清の潘德輿の『養一齋詩話』も「蘇小小歌」に触れないが、賀の評語に「みな夭亡の徴なり」といい、「みな極艶の辭をもって極惨の色を写し、宛として小説中の古殿荒園のごとく、紅妝の女魅、冷気人に逼り、燈を挑げてこれを視れば、毛髪竪たんと欲す」というのは「蘇小小歌」を含めているのだと解しうる。かれの詩人的感性は、生命の根源で疼くものを李賀の作品中に的確に見抜き、えたのだが、孔子主義の教養が、それを正面に表現することをさまたげたのだ。かれらの批評基準の根底は、ほかならぬ李賀の「蘇小小歌」によって徹底的に破砕されている。この拙稿を通読された親切な読者に、改めてそれを説く必要はないであろう。

だが、階級社会のうちにあっては、各種の思想は階級の烙印を打たれないものはない。時代と階級の制約を受けて、李賀はむろん儒法と反儒に不徹底で、かれの暗黒の現実に対する曝露も限られたものだった。地主階級の一員として、かれは労せずして食う生活をすごし、当時の詩は靡俗な生活と思想を表現した。《美人梳頭歌》、《蘇小小墓》のたぐいは無病呻吟の封建糟粕で；……（文曉思）

これは孔老二批判の渦中の中国で発表された「青年詩人李賀」（朝霞・一九七五年一月）の一節。全体は別稿で紹介する。日本の夜がまだ明けないように中国の夜もまだ明けないのであろう。蘇小小はやはり待ちつづけなければならず、西陵下に風は雨を吹きつづけなければならないのであろう。

（一九七五年十二月四日雨の降りはじめた夜）

付記

「明」郎瑛『七修類稿』（一九五九年一月）巻二七「蘇小小考」

蘇小小有二人。皆錢塘名娼。一南齊人。郭茂倩所編樂府解題下已詳明矣。故古辞有蘇小小歌及白樂天、劉夢得詩称之者。春渚紀聞所載司馬才仲事。並是南齊之蘇小小也。一是宋人。乃見於武林紀事。其書無刻板。其事隱微。今録以明之。蘇小小。錢塘名娼也。容色俊麗。頗工詩詞。其姉名盼奴。与太学生趙不敏相与甚洽。款遇二年。不敏日益曾。盼奴周給之。使篤于業。遂擢南省。得官授襄陽府司戸。盼奴未能落籍。不能偕行。不敏赴官三載。想念成疾而卒。有録俸余資。囑其弟趙院判分作二分。一以与弟。一命送盼奴。為言盼奴有妹小小。俊秀善吟。可語致之。佳偶也。院判如言至錢塘。有宗人為錢塘倅。托召盼奴領其物。倅為召之。有蒼頭至云。盼奴於一月前已抱疾歿。小小亦於潛県官絹事繫庁監。倅遂小小出。詰之曰。於潛官絹。汝誘商人一百疋。何以償之。小小回覆。此亡姉盼奴之事。乞賜周旋。非惟小小感生成之恩。盼奴在泉下亦不忘也。倅書其言詰就順。因問汝識襄陽趙司戸耶。小小曰。趙司戸未仕之日。姉盼奴周給。後中科授官去久。盼奴想念。因是致疾不起而卒。倅曰。趙司戸亦謝世矣。遣人附一緘及余物一篋外。有伊弟院判一緘付爾開之。小小自謂不識院判何人。乃拆書。惟一詩曰。昔時名妓鎮東吳。不恋黄金只好書。借問錢塘蘇小小。風流還似大蘇無。小小默然。倅令和之。辞不能。倅強之。責以官絹罪名。不得已和云。君住襄江妾住吳。無情人寄有情書。当年若也來相訪。還有於潛絹事無。倅大喜。尽以所寄与之。力為作主。命小小帰院判。与偕老焉。抑此。曰太学。曰錢塘。詩曰還大蘇無。則可知矣。又有元遺山所作賣美人長短句云。挽陰別院

宜清晨。人生春風秀。美人図子阿誰邪。都是宣和名筆内家收。　鶯鶯燕燕分飛後。粉淡梨花瘦。只除蘇小不風流。斜挿一枝萱草鳳釵頭。此詞既説鶯燕燕之後。此蓋是趙司戸小小也。今人止知是蘇小小。不知是何時人。輟耕既備載数事。辯以為南斉人矣。又不知有宋蘇小小。故復載眞美人之詞也。一本小小又作小娟。蓋抄之者之誤。殊不顧所寄之詩。若是小娟則音拗矣。何不另換一句。況又眞美人之詞可証。春渚紀聞又載。小小之墓。在錢塘県廨舍之後。蓋県原在錢塘門辺。去湖上西陵橋不遠。故古辞有何処結同心。西陵松樹下之句。此則南斉小小之墓。必在西湖上西陵橋。故油壁車之事。俱在湖上。若以托末仲之夢有妾本錢塘江上住之句。即云在江干。差矣。元人張元弼有蘇小小墓詩云。香骨沉埋県治前。西陵魂夢隔夢風烟。好花好月年年在。潮落潮生更可憐。註。墳在嘉興県前。今為民家所占。既曰県治。又曰西陵。亦不知而渾言。此必宋小小墳耳。何也。趙不敢乃長人。安知不住嘉興。院判既取小小。而終老可知矣。此得光弱不知有二而差言。予既辨長人。復辨其墓。以正輟耕之不足。

本文中に引いた李樹青の文で知られるように古代の逆里にも蘇小小と名のる歌妓がいた。「蘇小小」はすでに源氏名のようになっていたのだろうから、あつかいに注意がいる。また蘇小小やその墓をうたう詩は、本文では省略したが、霊隠の「蘇小小墓」など、後代になるほど頻出する。

2　わたしは少年のころ「蘇小小歌」を宇宙第一等の鬼詩と呼んだ。このたびの検討の結果からいっても改める必要はなさそうな気がする。とはいっても、宇宙はおろか、わたしの小さな仕事場の中の本さえ読み尽していない人間の口にするものとしては大言にすぎるので、そっとしまっておくことにしたい。

（十二月四日二十四時）

3 拙著『中国名詩選』（一九七三年五月）所収の原題を「蘇小小墓」訳題を「蘇小小の墓」としているが、それぞれ「蘇小小歌」「蘇小小の歌」と改める。なお原文の「冷翠燭」は「冷翠燭」のあやまりであった。

訳文は〈蘭の露／涙のごとし／とげむすべなきちぎりゆる／なほたちがたきよるのはな／草はしとね／松はかさ／風はもすそ／水はおび／塗籠の車／ひさに待つ／ひとがてに／冷やきともしび／西陵は／しぶきふる雨〉「啼眼」はないている目で、涙ではない、という批評をもらったことがある。至極もっともで訳出の際この点をずいぶん考えた。「なみだ」という語にはたぶん目の義をふくむだろう。なく目と涙とを分析せずにそれをなみだとしても不自然ではないだろう。そうして啼眼の二字を他の一字の漢字から送ぶとすれば「涙」の字が語意字面において印象的に近いだろう。そう考え、全体の音調をも勘案して定めた。大野晋等編『古語辞典』によれば、なみだは朝鮮語 nunmi（nun は目、mi は水で、涙の意）と同源か。という。その他の訳語もみなそれぞれに欠点をふくみ、わたし自身けっして改訂すべきところがないと考えているわけではない。

厳密にいえば、詩の翻訳は不可能である。その不可能事をあえてするのは、いろいろな理由があるが、翻訳の不可能を徹底的に思い知るためだ、とわたしのばあいは、いいうる。そのためには、解釈を行わけしてすますのではなく、日本語の詩として成立しつつ、原作の意味内容だけでなく音調、形態においても、それにできるだけ近似する努力をはらわなくてはならぬ。全体の文脈を生かすためには、時として部分の近似を抛棄しなければならぬこともある。少なくとも、全体の文脈を傷つけることなく部分においてもさらに適切近似のことばを見つけ出すまでは、その

観点からすると、拙訳はしばらく現状を保留して、さらに考按したい。沈兼士『広韻声系』は唐代の字音を推定する作業の一つである。それが李賀が自らの詩を吟誦した音調とどれだけ近いかはわからぬが、これによって「蘇小小歌」をうつし、拙訳をローマ字つづり（第一表）で表記したものを対照する。

ˌʒɨəu ˌlân luo˚	ran no tuyu
ˌnʒɨwo ˌdˈiei ˚ngan	namida no gotosi
ˌmɨu mɨuət ˌkiet ˌdˈung ˌsɨəm	togen sube naki tigiri yue
ˌien ˌxwa pɨuət ˌkˈâm ˚tsɨän	nao tatigataki yoru no hana
˚tsˈâu ˌnʒɨwo ˌʒɨen	kusa wa sitone
ˌʒɨwong ˚nʒɨwo kâi˚	matu wa kasa
ˌpung jwiɛ˚ ʒɨang	kaze wa mosuso
˚sɨ jwiɛ˚ biuâi˚	mizu wa obi
ˌɨəu piek ˌtsˈɨa	nurigo no kuruma
˚kɨəu ʒɨang dˈâi	hisa ni matu
˚liang tsˈwɨ ˚tsɨˈwok	kiegate ni
ˌlau ˌkwâng ˚tsˈâi	hiyaki tomosibi
ˌsɨei ˌliang ˚ruo	seiryo wa
ˌpung tsˈwiɛ˚ ˌjɨu	sibuki huru ame

4. 以後幾多飜訳 A.C. Graham (Poems of the Late Tang, 1965), J.D. Frodsham (The Poems of Li Ho, 1970) 及ビ 独訳 G. Debon (Chineisische Dichter der Tang-Zeit, 1964) ヲ挙ゲル。再掲シ加ヘテ次ニ比較ス。

Das Lied der Su Sian-sian / Auf heimlicher Orchis der Tau, / Gleich meinen Augen, die weinen. / Kein Wesen, das dem Herzen sich verbindet: / Im Dunst die Blüte widersteht dem Schnitter. / Gräser gleichsam ein kissen, / Kiefern gleichsam ein Schirmdach; / Wind mein rauschendes Kleid, / Wasser mein Gürtelgehäng: / Im Wagen mit prächtigen Wänden / Hab ich deiner gewartet. / Kalt die bläuliche Fackel, / Vertan ihr buntes Gefunkel. / Unter dem westlichen Hügel / Peitschen Wind den Regen. (Debon)

The Grave of Little Su // *I ride a coach with lacquered sides, / My love ride a dark piebald horse. / Where shall we bind our heart as one? / On West Mound, beneath the pine and cypress.* (Ballad ascribed to the singing girl Little Su, c.A.D. 500) // Dew on the secret orchid / Like crying eyes. No thing to bind the heart to. Misted flowers I cannot bear to cut. / Grass like a cushion, / The pine like a parasol: / The wind i a skirt, / The waters are tinkling pendants. / A coach with lacquered sides / Waits for someone in the evening. / Cold blu candle-flames / Strain to shine bright. / Beneathe West Mound / The wind puffs the rain. (Graham)

Su Hsiao-hsiao's Tomb // Dew upon lonely orchids / Like tear-brimed eyes. / No twining of love-knots, / Mist-wreathed flowers I cannot bear to cut. // Grass for her cushions, / Pines for her awning,

／Wind as her skirts,／Water as girdle-jade.／In her roll-silk carriage／She is waiting at dusk.
／Cold candles, kingfisher-green／Weary with shining.／Under the Western Grave-mound,／Wind-blown rain.
(Fr dsham)

5 〔明〕田汝成『西湖遊覽志餘』巻一六「香奩雲詩」は付記一の注になるだろう。
蘇小小者，錢塘名娼也，蓋南齊時人。其墓或云湖曲，或云江干。古詞云：『妾乘油壁車，郎跨青驄馬，何処結同心？西陵松柏下。』今西陵乃在錢塘之西，則云江干者近是也。宋時司馬標才仲初在洛下，晝寢，夢一美姝，牽維而歌曰：『妾本錢塘江上住，花落花開，不管流年度，燕子銜將春色去，紗窗幾陣黄梅雨。』才仲愛其詞，因詢曲名，云是『黄金縷』。後二年，才仲以蘇子瞻薦，応制挙中等，遂為錢唐幕官。為秦少章道其事，少章為続其後詞云：『斜插犀梳雲半吐，檀板輕敲，唱徹黄金縷。夢断彩雲無覓処，夜涼明月生南浦。』頃之，復夢美姝迎笑曰：『夙願諧矣。』遂与同寝。自是，毎夕必来，才仲為同寮談之，咸曰：『公廨後有蘇小小墓，得無妖乎？』不逾年，而才仲得疾。所乗遊舫，艤泊河塘，柁工遽見才仲携一麗人登舟，即前呰之，声断，火起舟尾，倉忙走報其衙，則才仲死，而家人已慟哭矣。
この本の「簡介」には入本書還有許多抄襲前人書中情節的地方，如第十六巻『香奩雙語』中記蘇小小与司馬標事，就出於宋人伝奇，……〉という，なお本書に「李賀蘇小小墓歌とあわせて百奈天楊柳枝詞：『蘇州楊柳任君誇，更有錢唐勝館娃，若解多情尋小小，緑楊深処是蘇家。』をかかげる。
6 本文を読み返してみたら，後にさらに触れることがあろう（10ページ）と書いた「同心結」

「同心帯」に触れていないことに気づいた。しかも別に触れなくてもよかったわけだ。他にも写したためたノートと共に棄てることにした。ただ『李賀研究』第十号・雑記80能改斎漫録（上）・銭塘蘇小小を本稿とあわせ読んでもらえると幸いである。

正　誤

2・4　光たる光彩↓光彩　8・2　誰か↓誰が　25・6　久しからざる…（董懋策）を第四行の次に挿入する　28・6　「煙」字…価値↓「煙」字の価値　30・8　「剪」時↓「剪」字　37・5　説明すれば↓説明すれば　39・13　出発しなければ↓出発しなければ　44・4　社偽↓社会　45・8　思いつく↓追いつく　48・1　枕席↓枕席　7　いいつる↓いいうる　57・17　孝次郎↓幸次郎　60・16　わたしの小さな↓小さな　48・10　高ようし↓高めよう。

（一九七五年十二月八日二十三時）

「法家詩人」李賀

1975.12.9.

一九七五年七月二十一日、東京教育大学学生町田静隆君が不在の宅に再度わたしを訪問された。その謝辞といれちがいに手紙で月刊『朝霞』一九七五年一月号に李賀に関する論文の掲載されたことを示され、八月一日にはその『朝霞』を、さらに八月十六日には『人民日報』一九七五年七月二十九日号のコピーを、恵投された。この誌紙に載った二論文を紹介し、感想をそえて、町田

君の厚情に対する感謝としたい。

『朝霞』に載ったのは、上海師大中文系・文曉思「青年詩人李賀」で七四―八〇ページを占め、編集者がつけたと思われる欄外見出しには「法家詩文選読」とある。『人民日報』のは王向峰の「法家詩人李賀」で第三面の半ばを占める。内容はよく似るので、まず文論文の要点を列挙し、そこにない王論文の要点をのちにあげる。個条の整理番号はわたしの便宜でつけた。

1　北宋の反動儒者宋祁が李賀を称して"鬼才"として以来、李賀は一個の現実を離脱した頽廃詩人にされてしまった。これは全くの歪曲だ！　ちょうどその反対で、李賀は一人の鬼神を信ぜず、権貴をおそれず、現実政治の改革を切実に要求した青年法家詩人で、わが国文学史上、屈原・李白の後を継ぐ、また一人の重要な浪漫主義詩人だ。

2　唐代中葉は安氏の乱よりのち、階級闘争と儒法両条路線の闘争が激化した。当時、藩鎮と称ばれた大小軍閥が独立王国を形成し、朝廷内では宦官が政治・軍事・経済の大権を掌握し、この二つの反動勢力が唐王朝を危機に陥れていた。改革を志した法家王叔文・柳宗元・劉禹錫らが、分裂に反対し、統一を堅持し、藩鎮・宦官等豪族大地主と堅固な闘争をしていた。李賀はかれらの改革運動に直接参加はしなかったが、王叔文団に同情し支持し、《感諷五首其二》の中で西漢法家人物晁錯を哀弔することを借りて王らの失敗の不当を弁じた。

3　李賀はつねに詩中に現実に対する不満の情緒を流露し鋒芒あらわであった。年若くして詩壇に頭角をあらわしたので封建統治集団に排斥迫害された。賀の腐敗した現実に対する不満は加わ

小説闘争の意志はさらに確定した。の方奉礼郎という祭祀管理の小官になりはしたが、臣妾気態間（贈陳商）といった奴婢的地位にいることをいさぎよしとせず、久しからずして辞職した。《閑愁歌》《致酒行》などにかれの闘争的性格と理想追求が表現される。詩人の黎明に対する熱烈痛切な待望は、吟詩一夜東方白、（酒罷張大徹索贈詩）、星尽四方高、万物知天曙、などに情を尽してうたわれる。

4　伝存する李の歌詩は二百余首にすぎないが、その多くは階級的思想内容を具有し、ある程度封建社会の暗黒と人民の苦痛を曝露し、かれの政治改革を痛切に要求する法家思想を表現した。《感諷》の中で詩人はわれわれに官吏が人民を食い物にする場景を一幅の絵にえがいてくれた。この詩は、叙述あり、対話あり、議論あり、写し得て生動活潑、農村における苛刻な収奪現象を典型的に反映する。

5　李賀は対内的には藩鎮の割拠に反対し、対外的には鞏固な抗戦を主張した。《南園第七》にみえるかれの武芸学習の目的は国家的統一に貢献するためで《雁門太守行》では敵の侵略に反抗する戦士らの英勇な犠牲的戦闘精神が歌頌され、詩人の抗敵愛国思想が体現する。

6　《馬詩二十三首》は当路者が暗黒政治を改革し優秀な人材を採用する法家路線を実行することを希望したもので、《呂将軍歌》《感諷》では婦女・宦官の統兵専権に反対している。

7　かれはまた熱情をもって秦の始皇を歌頌し、《秦王飲酒歌》に、浪漫的手法で始皇の威武形象を塑造した。"劫灰飛尽古今平"一句は、始皇の割拠を平定し全国を統一し焚書坑儒した重大な歴史作用を充分肯定している。《長歌続短歌》では始皇への衷心の仰慕と熱烈な追慕を表現し

た。

8　法家を尊重すれば必然的に儒家に反対する。《楊生青花紫石硯歌》で李賀は、無名の石工の技芸をたたえ"孔硯寛頑何足云"と結び、儒家の偶像孔老二を批判した（孔丘の在世時、まだ筆硯はなかった。"孔硯"は後世儒家の捏造であることはっきりしている）。《古悠悠行》では儒家の"天不変、道亦不変"の唯心主義謬論を批判し、天地万物はすべて運動変化のうちにあるという素朴弁証法思想を生きいきと反映した。

9　かれは《金銅仙人辞漢歌》《浩歌》《官街鼓》《苦昼短》などで長生不死の謬論を否定し、これに迷う皇帝の愚妄無知を諷刺し、素朴唯物主義思想を表現し、儒家の"天命論"に大胆に挑戦した。漢の武帝を"劉郎"とよびその皇后を"蘭娘"とよんでははばからず、毫も諱を避けなかった。

10　李賀の死後十五年、他の尊法反儒的傾向の詩人杜牧は李賀詩集のため序を書き、賀が屈原の浪漫主義精神を継承したことを賞讃した。賀は屈原を仰慕したが、屈原が投身自殺したやりかたには不賛成（笠後引）で積極闘争を主張し、《野歌》には奮発有為の楽観主義情緒を反映する。

11　特異な想像と理想的境界を実現するため詩人は心をこめて言葉を錬磨し、精煉した清新な言葉を使って豊富な思想内容を概括する。李賀の清新奮発な詩句の運用によってかれの詩歌はさらに気勢に富み、浪漫主義的瑰麗の色彩をはなかにした。

12　李賀は現実に不満で、改革を要求し、統一を要求し、儒家の伝統観念に敢て批判し、ある程度の闘争性をもつ。ただ階級社会では"各種の思想は階級の烙印を打たれないものはない"時

代と階級の制限をうけ、李賀はむろん道法と反儒にすべて不徹底で、かれの暗黒の現実に対する暴露も限られたものだった。地主階級中の一員として、かれは労せずして食う生活をすごし、若干の詩は俗な生活と思想を表現した。《美人梳頭歌》《蘇小小歌》のたぐいはまさに病気もせぬのにうめく封建の力。またある詩は情緒低落、語言晦渋、思うにまかせず抑鬱苦悶の消極的情緒を反映し、《悼公》等のごとき、これらはすべてわれわれの審査分析批判が必要だ。（以上　文暁思）

13　李賀は胸いっぱいの熱情を、物にたして志をいい、新しい事物の成長のために少なからぬ導美詩を書いた。《馬詩二十三首》其十二、《昌谷北園新筍四首》

14　李賀は実際生活において労働人民の知識才能があの〝高貴な〟儒者よりはるかにすぐれることを見出し歌った。《五粒小松歌》《李憑箜篌引》《楊生青花紫石硯歌》

15　法家路線の君主として、秦の始皇・漢の高祖・唐の太宗を、李賀は非常に推崇した。《長歌続短歌》《春坊正字剣子歌》《公莫舞歌》《馬詩二十三首》其十六。（王向峰）

今日の中国で使われている〈法家〉ということばがどのような意味内容をさすのか、わたしには正確にはわかっていない。新聞雑誌にあらわれる諸文章からうける印象では、「革新的」「改革的」「反儒教的」と日本語でいいうるものはすべて〈法家〉の語でくくってよいらしくみえる。

右の二論文は、その大体の方向においては、わたしの李賀観と合う。しかし例示された作品の理解において根本的に違うものがかなりある。5の〈武芸学習〉を〈国家的統一に貢献するため〉と読んだのでは「南園」第七首のシニックを見落したことになる。「秦王飲酒歌」「長歌続短歌」の「秦王」を秦の始皇と見ることに問題があることは森瀬秀三論文が指摘する。7の意見には全

面的に賛同しがたい。10にいう杜牧の序が李賀賞讃文ではありえないことは拙稿「杜序」荒井健「杜牧」が詳論する。12にいう「蘇小小墓（歌）」を〈無病呻吟封建糟粕〉とする理由が示されないので判断に苦しむが、この詩を非難する点でこの論者は〈反動儒生〉と軌を一にする。本誌拙稿「蘇小小」でのべたので再説を避ける。「悼公」は軽率に読めば遊蕩文学だが、実は男女の平等を知性と感性の両面で謳歌した作で、場所を遊里に選定したのは、

唐詩最盛，妓中能詩者尤極多，因此更為一般文人学士所傾倒；良家婦女的詩什，流伝反到很少。這往往有一個重要的原因，我以為娼妓的思想与精神是自由的，解放的，流動的，而良家婦女的精神，組他的身体一樣，是拘束的，羞涙的，程楷於礼教的，所以沒有什麼真情，也就不能做什麼真情流露的詩了。（陳素素「中国婦女生活史」）

という「たぶん事情によるものと察せられる。拙稿「悼公」はすでにこの作を論真分析批判して文論文とは違った評価を提示している。

文・王二論文は、一九五七年ごろに出た中国人の李賀論にくらべて見方が深まっているように感じるけれども、個々の作品の検討においては、伝統的注家の説を鵜呑みにしたところが目につく。青花紫石硯はぜいたくな文具でわたしの机上に近づくことは永遠にないが、それを彫り上げる無名の石工の技芸とその結果の美は、想像するだけでうっとりする。詩の解釈や詩人論作製にも無名の石工のような技芸を要求するのは、失礼なことではあるまい。

（一九七五年十二月十日二十四時二十八分）

李賀も、柳宗元も、仏典をよく読んだ。その点に深く探針を入れずにこれら詩人の思想・芸術